哲学科3年前期「哲学演習13」

来年に迫る卒業論文制作に関して

191C00073　　文学部哲学科3年　　内山栞

はじめに

来年に迫っている卒業論文制作について、筆者は「無常」という思想を中世・近代文学研究者である唐木順三（1904-1980）の思想をもとに執筆しようと目論んでいる。それに先立ち、本稿では具体的に来年度の卒業論文制作でどのようなことを執筆するのか、結論としてどのような見解に辿り着く予定であるのか、現段階での主張、展望を掲げることを目的として論を展開してゆく次第である。ここに示すことで、来年度の執筆制作が順調に進んでゆくことの足掛かりとしてゆきたいと思う。

第1章　「無常」について書くことのきっかけ

そもそも、なぜ「無常」について書こうという意思に至ったのか。それは、元来筆者が日本哲学に興味があった、ということが第一である。但し具体的に「無常」に焦点が定まったことの理由として、昨年度の講義「日本思想史」の影響が大きいのは間違いない。前期のレポートでは、鴨長明の『方丈記』と兼好法師の『徒然草』を扱い、人生観を問いただすレポートを執筆したが、そのレポートについて「無常/無常観」の理解の不十分さを先生に指摘された。その反省を踏まえ、後期のレポートでは具体的に「無常/無常観」を取り上げ、「無常の真意」について論じたのである。「無常の真意」、それは我々が無常と無常観、はたまた無常感を混同して理解しているのではないか、という気づきから生じた論点であった。唐木によれば、はかなし（無常感）という言葉は中世女流文学的かつ情緒的表現であり「世」を男女の仲として捉えることにおいて生まれた。それが突如として無常に「急勾配」してゆく。それは、凄まじい戦乱を経験した「兵」が＜現実の事態の当事者＞として経験していったことで自ずと生み出されていったのである。「兵」の世は殺伐としており、いつ何時も決して気を抜くことができない渦中にいる故に、ただ戦において死ぬということだけが決まっている。人間の通常の理解で言えば本来的には生が「自然」であり、死が「無常」であるはずである。しかし、彼ら「兵」にとっては死ぬことが想定内であるが故に、生が「無常」となってしまうのである。こうした、「世」を単なる哀感的、詠嘆的に捉え表現しきれない事態によって、はかなしから無常へと移り変わっていったのである。

そこからさらに焦点を絞って、「無常とは－根本的範疇である」という唐木の言葉の真意について探った。端的に言うと無常とは、主も客もなく混沌としており、凡てを含蓄した世界のありようそのものなのである。しかし、それが「感じる」ことにシフトされると、無常が無常感となったり、詠嘆的、哀愁的に省みたりすることで無常観となったりするのである。このように昨年度の日本思想史のレポートでは、我々が如何にして無常と無常観、無常感の意味を履き違えているかを明らかにするとともに、無常の真意を明らかにしたのであった。

第2章　なぜ唐木の文献を扱うのか

重要な問題点を２年次のレポートで明らかにしたということも忘れてはならない。無常を語ることは可能であるか、についてである。筆者は、無常それ自体を語ること（あるいは、文字にて表現することについて）は全く以って不可能であると考える。というのは、先述した通り、無常とは世界のありようそのもののことである。加えて、その渦中においては嬉しいとか楽しいといった感情はもちろん、悲しいという思いさえも生じ得ない。殺伐とした世の中においては読んで字のごとく、「常」が「無」く、「無」が「常」なのである。そのような絶望の淵に陥った際、もしくはそれをも超え出た事態に瀕した際、おそらく何か装飾づけて語ることはしないであろうし、もはや何も語れない、何も語ろうとしないのではないであろうか。無常の渦中にいる時分、語ることは到底不可能である。のちに振り返ってみて無常について語るとか、文章で

以って表現するとかはあり得ることかもしれない。だが、その「のち」という時点で当事者性が限りなく薄れており、それが無常そのものを体現するとは思えないのである。百歩譲って仮に無常が語れるものとしよう。唐木によれば、日本人は無常について語る際、雄弁となり、文字で表現する場合においては美文調になるという強い特徴があると言う(唐木　「無常」p.414 l.5-l.6)。筆者に言わせれば、雄弁、美文調で以って無常を表現するのは、言い換えると無常を誇張することである。従って、この点からも世のありようそのものとしての無常とは言えないのではないであろうか。唐木は著作『無常』において、無常が語れるものか否か定義づけてはいない。しかし、筆者が『無常』に目を通して解釈する限り、彼自身は無常が語れることを前提として論を展開している。筆者としては、たとえ尊敬している唐木順三の見解であるとしても、やはり無常それ自体を語ることは、上述した内容より、全く以って不可能であると考える。

話は変わるが、なぜ文学研究者である唐木順三の文献をもとに無常を論じることを試みたのかを記しておきたい。仏教思想が根強い日本においては、無常を扱う研究者、また彼らの執筆した文献は数多くあるはずである。そんな中でも、なぜ唐木順三という一人の文学研究者の著作を選んだのか。彼の著作を読んだのは、昨年の「日本思想史」のレポートを踏まえて、先生から『無常』を薦められたことがきっかけである。無常と無常観、はかなし（無常感）はどのように違うのか、著作を読み進めてゆくうちに各々の相違点を掴んだ。翻って見るにそれができたのは、唐木の類稀なる文章力があったからである。唐木の書く文章は洗練されており、読んでいて惚れ惚れしてしまうほどである。そして内容がとり易いことも特徴の一つである。のみならず、彼の全集『唐木順三全集』を手に入れ、実際に『無常』以外の彼の文章、例えば現代論やエッセイなどにも触れ、唐木順三が如何に魅力的な人柄かを理解したのである。そういった経緯もあり、ぜひ唐木の執筆した文献を扱い、無常についての卒業論文の制作に励みたいと思った次第である。唐木の見解を下地にし、そこから如何にして無常についての議論を自分なりに展開できるのか、今この瞬間から身が引き締まる思いである。

第3章　唐木の「無常」を扱って何を書きたいのか

この章では卒業論文にて、唐木の「無常」を扱って具体的にどのようなことを書きたいのかについて論じる。筆者は現段階で最終的には、現代における無常について論じたいと考えている。その理由としては、唐木が著作にて次のように述べているからである。

（前略）「無常」は、今日では世界的な意味をもつ、またもちうる内容があると、私は思う。（中略）
今日ほど「無常」の事態を眼前にさらけ出している時は、そうざらにない。現実の事態が「無常」なのである。言ってしまえば、ニヒリズムが普遍化し、すでにニヒリズムという実態が観念されえないほどに、ニヒリズムそのものが、のさばっている。ニヒリズムはすでに特定人の特定の主義や意見ではない。世界を挙げてニヒリスティックなのである。ひとはそのなかにありながら、それを意識しえない。その現実に、一見は不満はなさそうにみえる。いな、それをこそ新しい時代と思っているようにさえみえる。然し、根本のところでは、世界を挙げてこのことのために不安である。繁栄し、進歩すればするほど不安である。この繁栄、この進歩が、死への、滅亡へのそれではないかという不安は世界の現実である。
（唐木　「無常」p.253 l.13、p.254 l.2-9）

遥か昔、人々は信仰のもとにおいて我々の存在を存在たらしめていた。日々の信仰に自分の身を捧げることにこそ、生き甲斐とも言えるものを見出していたのである。然し、時代とともにその信心は薄れ、同時に、あらゆる事物の発展を遂げ、時代は資本主義社会となった。上に立つものと下にいるものとの力関係によって成立する社会において、あらゆる選択肢が増え、どこに生き甲斐、価値を見出すかについて縛られることは無くなった。だが、そういった自由な世界において、かえって人々を不自由にさせているのではないか。人生に正解はなく、日常においてどこか価値を見出すことができなければ、それは果てしなく続く。しかも、成功し繁栄が進んだとしても、不安が残るのである。

このことは現代、我々が生きるこの社会においても同様ではないか。最先端の高度な通信技術によって人々の暮らしのみならず、あらゆる物事を実現することが可能になった。我々の生活は無自覚的に着実に豊

かなものとなったのである。また、結婚するしない、恋人を作る作らない、仕事を選ぶ、どこに住居を構える、どのようなことを生き甲斐にする。唐木の生きた時代よりもさらに人々の目の前には自由な選択肢が存在する。その割に皆が一様にして不安なのである。いや、むしろ、このような「自由すぎる世界」故に不安なのである。筆者も日常、生活を送る中でどことない不安に襲われている。この不安がどこから来るものなのか明確には分からない。日々漠然とした不安なのである。家族、友人、知人、物に恵まれ何不自由のない生活をしているにもかかわらず、この不安は尽きない。

この漠然とした実体のない不安、いうなれば無常の事態は克服されるのであろうか。筆者の見解から述べると、全く以って克服されることはないと考える。資本主義社会、科学技術の進歩、多様性を認める社会、そのどれもが余すことなく具現化されている今、もはや我々は、無常から逃れられないのである。

大まかではあるが、来年度の卒業論文では上述したように、現代における無常について論じていくことを考えている。結論としては、無常を克服することはできず、ただ、我々はその中で生きることしかできないというものである。そのような世界においてどのように生きることが望ましいか、それについても考えてみたいと思う。

終わりに～これからの展望～

本稿において示したのは、来年度の卒業論文制作の内容に関することであった。筆者は、唐木の論文『無常』を扱って執筆しようと考えている。それに先立ち今回、無常を論文に扱うことのきっかけ、なぜ唐木の文献を扱うのか、そして具体的に『無常』を扱って何を書きたいのか、について論じた。

本稿における内容の中心は、2年次の期末レポートでどのようなことを執筆し、そこから如何にして無常を具体的に卒業論文で扱っていきたいか、その変遷を示したことであった。そのために、卒業論文の内容自体は、まだ全然と言って良いほど、明確化されてはいない。然し、その論文を下支えするためのことはいくらかはっきりとしているので、それだけでも今ここに示しておこうと思う。

一つに、第2章で述べた、無常を語ることは可能か不可能か、について。現時点で、筆者は不可能であると考えている。それに反して唐木は無常を語ることは可能であるように述べている。しかも、明確にそれについて言及してはいないのである。「無常を語る」ことは未だにはっきりしていない問題である。故に、これから唐木の著作を読むにあたって考えなければならない論点である。唐木の著作を読むことで、彼の見解の本質を探りたいと思う。

二つに、唐木の著作『無常』のみならず、彼の現代論、エッセイなども卒業論文制作で扱うことである。筆者はただ無常について論じることのみを目標にしているのではない。『無常』を執筆した唐木の人柄、生き様を感じ、その魅力を文章にて表現したいのである。ひいては、彼の現代論、エッセイを『無常』と共に取り扱うことが得策であると考えている。

以上、この二つのことが今の段階では決まっている。これから卒業論文制作に向けた活動が本格化するにあたって、個人での活動も重要となる。如何に唐木の見解に切り込むか。如何に堅実に執筆を進めるか。今この時期にかかっているとも言えるであろう。これから、手始めに唐木の著作全集を読み、どの部分が論文執筆の材料にできるか、可能な限り知見を広げることを目標としたい。

（総字数　　4,493）

参考文献

唐木順三　　解説　粕谷一希　『唐木順三ライブラリーⅢ　中世の文学/無常』中公選書　2013年9月10日初版刊行